

作られた世間話

——『今昔物語集』卷二十九第三十八話、「母牛突ニ殺狼一語」考——
付、『今昔』の母と子

高橋 貢

作られた世間話

一

『今昔物語集』卷二十九第三十八話「母牛突ニ殺狼一語」は次のような内容の話である。

秋の夕方、飼い主に田に置き去りにされた母牛が、子牛を狙って、子牛の周りをまわっていた狼に立ち向かって、頭を狼の腹に突きつけ、狼が死んだことも気がつかず、秋の長い夜の間立っていた。朝になって、飼い主は牛を牛小屋に入れなかったことに気がつき、田に出たところ、母牛は狼を突きつけたまま立っており、子牛は側に鳴きながら伏していた。

（今昔、奈良ノ西ノ京辺ニ住ケル下衆ノ、農業ノ為ニ、家ニ牝牛ヲ飼ケルガ、子ヲ一ツ持タリケルヲ、秋比田居ニ放タリケルニ、定マリテタサリハ小童部行テ追入レケル事ヲ、家主モ小童部モ皆忘レテ、不追入ザリケレバ、其ノ牛、子ヲ具シテ田居ニ食行ケル程ニ、夕暮方ニ、大キナル狼一ツ出来テ、此ノ牛ノ子ヲ咋ハムトテ、付テ廻リ行ケ

ルニ、母牛、子ヲ悲ムガ故ニ、狼ノ廻ルニ付テ、子ヲ不咋セジト思テ、狼ニ向テ防キ廻ケル程ニ、狼、片岸ノ築垣ノ様ナルガ有ケル所ヲ後ニシテ廻ケル間ニ、母牛、狼ニ向様ニテ、俄ニハクト寄テ突ケレバ、狼、其ノ岸ニ仰様ニ腹ヲ被突付ニケレバ、否不動デ有ケルニ、母牛ハ、「放ツル物ナラバ我レハ被咋殺ナムズ」ト思ケルニヤ、力ヲ発シテ後足ヲ強ク踏張テ、強ク突カヘタリケル程ニ、狼ハ、否不堪ズシテ死ニケリ。

牛、其レヲモ不知ズシテ、「狼ハ未ダ生タル」トヤ思ヒケム、突ヘ乍ラ、終夜秋ノ夜ノ永キニナム、踏張テ立テリケレバ、子ハ傍ニ立テナム泣ケル。

此ヲ、牛主ノ隣也ケル小童、其レモ亦、牛追入レムトテ田居ニ行タリケルガ、狼ノ牛ヲ廻行ケルマデハ見ケレドモ、幼キ奴ニテ、日ノ暮ニケレバ、牛ヲ追テ家ニ返リ来タリケレドモ、此モ彼モ不云デ有ケルニ、彼ノ牛主ノ、夜嗟テ、「夜前牛ヲ不追入ザリケル。其ノ牛ハ食ヤ失ヌラム」ト云ケル時ニゾ、隣ノ小童部、「御牛ハ、夜前然々ノ所ニテコソ、狼ノ廻リ行シカ」ト云ケレバ、牛主、聞驚テ迷ヒ騒テ行テ見ケレバ、牛、大キナル狼ヲ片岸ニ突付テ不動デ立テリ。子ハ傍ニ泣テ臥セリケリ。牛主ノ来レルヲ見テ、其ノ時ニナム狼ヲ放タリケレバ、狼ハ死テ皆□テナム有ケル。

牛主、此レヲ見テ、「奇異」ト思ケルニ、「夜前、狼ノ来テ昨ハムトシケルヲ、此ク突付タリケルニ、放テハ被瞰ナムズト思テ、終夜不放ザリケル也ナリ」ト心得テ、牛ヲナム、「極ク賢カリケル奴カナ」と讚テ、具シテ家ニ返ニケリ。

然レバ、獸ナレドモ、魂有リ賢キ奴ツハ此ゾ有ケル。此レハ、正シク其ノ辺ナル者ノ聞繼テ、此ク語り伝ヘタルトヤ。

(新日本古典文学大系による)

当該話について旧日本古典文学全集は、話の解説で「前話同様畜生残害の話で、同時に動物社会も情は人間社会に

変わらぬことを伝えていいる。いかにもありそうな話である上、本話から母の子を思う情は動物も人間に異ならずとする教訓性、または寓話性が導き出されることから、本話は、明治以降、その時々にあざわしい形に焼き直されては諸書に収録され、幼童教育の資とされてきた。」と述べる。(新全集も同趣旨の解説を付す)。この話は『本朝語園』(宝永三年(一七〇六)刊)、巖谷小波編『大語園』(平凡社、昭和十年(一九三五))もとり上げられていることから、近世以後、比較的知られている動物話であった。

なお当該話について、昨年(平成十五年(二〇〇三))一月、早稲田大学の「今昔の会」輪講会で報告を行ったが、その時、白石美鈴氏から、小さい時に水田で雌牛が若い男を頭で押しつけているのを見たことがある、との教示があったので、必死になった母牛が子牛やわが身を守るために狼の腹を押しつけることはあり得たとは考えるが、当該話が事実そのままの話かという点、疑問の点がある。むしろ当該話そのものは作られたのではないかと考える。左にその点について述べる。

当該話は、ある秋の夜長の^(注1)、奈良西の京の農家での出来事^(注2)をとり上げる。牛の飼い主も小童部も、夕方、牛を牛小屋に入れるのを忘れて家に入ってしまう。その後、母牛と子牛は外に残されるが、子牛を狙って狼が子牛の周囲をまわる。この一晚の出来事はだれも見えていない。それにもかかわらず、だれかが見ているかのように叙述する。

飼い主と小童部が家に入ると、周囲は暗闇^(注3)に包まれる。秋の長い夜の始まりである。だれも見えていないはずの暗闇の中で、母牛が「ハク」と狼を突く擬声語と、子牛の鳴声だけが耳に訴える。音の叙述が印象的で、効果をあげる。しかもそれだけではなく、音と後述の心中思惟語が行動の叙述とあいまって、時間を経過させ、話を展開させる。相乗効果を高める。

暗闇の中での音の効果については、小峯和明氏『今昔物語集の形成と構造』(笠間書院)一六六ページで指摘する

が、例えば馬盗人を射る話として著名な卷二十五第十二「源頼信朝臣男頼義射二殺馬盗人一語」では、暗闇の水の中を「ツフツフ」と馬を歩かせて逃げる馬盗人を父頼臣の「射ヨ、彼レヤ」と言う声も終らないうちに、頼義の射る弓の音がし、人の乗らない馬のあぶみの「カラカラ」という音がする。音が効果的に働いているだけでなく、音の連続で短い時間の緊張感をあらわし、話を展開させている。

当該話で、母牛が狼を突く時に「ハク」という擬声語を使用する。この語は卷二十八第四十四「近江国篠原入二墓穴一男語」にも使用する。この話は、下衆男が墓穴で雨宿りをしていると、夜更けに何かが入って来る。恐ろしく思っている、暗闇の中に物を「ハク」と置き、次に「サヤサヤ」と鳴る物を置く。この音で男は入って来たのは人間だと理解する。音の効果が実体を確かなものにすることに働いている。

暗闇の中の叙述のもう一つの特徴は心中思惟語の働きである。前掲二話の中の馬盗人話(卷二十五第十二話)の場合、雨夜に東国から連れて来た馬が盗まれたと聞くと、源頼信は「東ノ者ノ(中略)京ニ来タリテ、此ル雨ノ交レニ取リテ去リヌルナルベシ」と思つて、盗人を馬に乗つて追う。子の頼義も同様に思つて追う。賀茂川原を過ぎると雨が止み、空が晴れて来る。思惟語と行動の叙述が組み合わされて話が展開する。下衆男の墓穴雨宿りの場合も同様である。男が墓穴で雨宿りをしていると、何かが入って来る音がする。「此レハ鬼ニコソハ有ラメ。(中略)今夜命ヲ亡シテムズル事ヲ」と嘆き、恐ろしく思つてじっと座っている。音と心の動き、行動で時間が経過する。

当該話(卷二十九第三十八)の場合も同様である。夕方、大きな狼が子牛を狙つて、ついてまわる。母牛は子牛を食わせまいとして、子牛をかばう。母牛が狼の腹を突くと、狼は崖に押しつけられて動けない。母牛は、狼を放したならば、自分も食い殺される、と思つて、さらに強く突きつける。狼は死ぬ。母牛はそのことにも気がつかず、狼はまだ生きていると思つて、一晩中そのまま立ち続ける。狼が死んで、母牛と狼の格闘は終る。動から静にかわるが、

緊張感にはりつめた静の長い秋夜の時間が続く。一方、子牛にとっては目前の出来事が何なのか分からぬ。母牛のそばにいて鳴き続ける。始めは立っているが、朝になると鳴き疲れて伏せる。三者三様に書きわけられる。子牛の鳴き声は母牛の行動を引き立たせる。

ところで母牛の思惟語について、原文を引用すると、時間の経過とともに1「子ヲ不昨セジ」ト思ヒテ、2「放チツル物ナラバ、我レハ被昨殺ナムズ」ト思ヒケルニヤ、3「狼ハ未ダ生キタル」トヤ思ヒケム」と書きわけられる。この思惟語は、実は母牛が思ったのではない。2「思ヒケルニヤ」、3「トヤ思ヒケム」の「ヤ」（疑問の意）、「ケム」（過去推量の意）の使用から明らかのように、夜が明けて後の牛の飼い主が母牛の立場になって推量したことになる。

右の思惟語の中の1「放チツル物ナラバ、我レハ被昨殺ナムズ」ト思ヒケルニヤ」の一文は、類似の表現として、話末近くでくり返される。即ち、夜明けて後に牛主が現場を見て、「夜前、狼ノ来テ昨ハムトシケルヲ、此ク突キ付ケタリケルニ、放チテハ被噉ナムズ」ト思ヒテ、終夜不放ザリケル也ナリ」と知り、母牛の行動をほめ、牛を連れ帰った、と記す。母牛の思惟語「放チツル物ナラバ」云々が牛主の思惟語「放チテハ」云々でくり返される。牛主の思惟語に「ト（母牛が）思ヒテ、……也ケリ」とある。この「ケリ」は確認の意で、ここで牛主が始めて気がついたことになる。このことから考えると、母牛の思惟語1、2、3に「ト思ヒテ」「ト思ヒケルニヤ」「トヤ思ヒケム」と、「思フ」をくり返すが、思ったのは母牛ではなく、実は牛主と背後にいる話の語り手ということになる。疑問に思い、推量したのは、文脈の上からは牛主であるが、実は背後にいる語り手である。両者が母牛を想像して書いていることになる。以上の点から、この話は事実談の体裁をとっているし、また右に述べたように、母牛が子牛やわが身を守るために狼を頭で押しつけることはあり得たとは考えられるが、当該話そのものは語り手によって作り上げられ

た可能性が大きいとみてよい。

二

成語との関わり

右で、当該話は世間話の体裁をとっているが、語り手によって作られた可能性がある、と述べたが、このことを成語との関わりから述べてみたい。

当該話について、日本古典集成『今昔物語集』は注十七で、女牛の角は湾曲している、そのような角に突き刺されることはあり得ないことから、意外なこと、滅多にないことの成語が「女牛に腹をつかれたるたぐい」として、『袋草紙』『古今著聞集』等に見える、と指摘する。

この成語は、右以外に『十訓抄』『譬喻尽』にみられるが、ここでは『袋草紙』の原文を引用し、検討する。

「俊綱朝臣播磨国に下向の間、高砂においておのおの和歌を詠ず。而して大宮の先生藤原義定これを詠ず。

われのみと思ひこしかど高砂の尾上の松もまだ立てりけり

人々感嘆す。良暹云はく、「女牛に腹つかれたるたぐひかな」と云々。自づからかくの如きこと有るなり」

(新日本古典文学大系による)

『袋草紙』によると、歌をよむことでは素人に近い藤原義定が人々を感嘆させる歌をよんだ。その時、良暹は「女牛に腹つかれたるたぐひかな」と評したという。義定の右の歌は『後拾遺和歌集』に採られている。勅撰集にとられた義定の歌はこの一首だけである。一方の良暹は『後拾遺』だけに限っても十数首の歌がとられており、歌人として

活躍している。

ところで『後拾遺』『袋草紙』の諸注等によると、良暹は後朱雀、後冷泉期の人で、比叡山僧、祇園別当、康平(二〇五八—一〇六五)頃没とのこと。一方『今昔物語集』は一二二〇年以後の成立と考えられている(新日本古典文学大系『今昔物語集』一、解説)。これらの検討から、良暹は『今昔』成立期より六十年以上前の人である。『今昔』所収の当該話がいつ頃作られたのかは未詳だが、良暹が引用した成語がこの話の作成以前にすでにあった可能性がある。言いかえると、この成語にヒントを得て話が作られたと考えることが可能である。

なお右の成語は『角川古語大辞典』『日本国語大辞典』も引用する。『日本国語』は「めうしに腹突かれる」の項に「おとなしく、角も曲がついて人を傷つけないはずの牝牛に腹を突かれるの意から、意外なできごとでひどい目にあうことのとたとえ」と説明する。

三

話の事実化

ところで当該話の話末に「此レハ、正シク其ノ辺ナル者ノ聞キ繼ギテ、此ク語り伝ヘタルトヤ」の一文がある。この一文によると、当該話は事実話として土地の人々の話題になっていたことになる。またこの一文の前に「然レバ、獣ナレドモ魂有リ賢キ奴ハ、此クゾ有リケル。」の評語がある。この評語から話末の「語り伝ヘタルトヤ」までを通してみると、『今昔』作者(あるいは撰者)はこの話を実際の出来事とみていたらしい。またこのことは冒頭部をみても同様に言い得る。奈良の西の京という場所の設定、また秋という季節、夜長という時間の長さ等、いかにも話の

説得性に効果があるように作られている。

それでは当該話が実際の出来事に基いての話かという点、すでに右で分析したように、無理がある。私は平安中期から後期にかけて、良暹が述べたような成語があつて、その成語にヒントを得て作られた話と考える。その話を事実化するために、冒頭部や話末の一文が付加された、と考える。

四

当該話にみる母と子

当該話は短い話であるが、『今昔』の性格とも関わる様々な問題を含んでいて、それらを一言で述べることはできない。右に述べた、作られた世間話の問題もその一つである。次にこの話を介して、母と子の問題をとり上げる。

この話は、普段はおとなしいはずの牝牛が子牛や自分の命を守るために、必死になって狼に立ち向かい、狼を殺す。この話にみる母と子の対比は『今昔』の他話にもみられる共通の問題である。

この話の冒頭部では「牝牛」とあるが、子牛を守る立場になると「母牛」に転じる。この呼称の転換の意味は重要である。牝牛の場合は子牛の意識はないが、子牛を意識して呼称が「母牛」になるからである。このことは他話についても同様に言うことができる。例えば巻十二第二十五「伊賀国人母、生レ牛来ニ子家一語」では、高橋東人の母が、子の物を勝手に使用したために赤い牝牛に生れる。巻二十八第三十五「右近馬場殿上人種合語」では、種合せの時に老法師を牝牛に乗せる。両話では「母牛」とは記さない。話に子牛が出ないからである。一方、巻一第三十四「長者家牛、供ニ養仏一語」には「母牛」が登場する。子牛を生むからである。

ところで、当該話の母牛は、夕方に狼が子牛を狙って周囲をまわると、子牛を「悲シムガ故ニ」狼に立ち向かう。「悲シム」の語意は、新日本古典文学全集、新日本古典文学大系所収本の注に「いとおしむ、たいせつなものに思う」「いとしく思う」とあるが、「仏ハ平等ノ慈悲ニ在マス。一子ノ悲かなしみヲ垂レ給」(巻一第三十八「舎衛國五百群賊語」、『私聚百因縁集』の同話にも同趣の表現がある)、「仏ハ(中略)一切衆生ノ為ニ、平等一子ノ悲かなしみヲ垂レ給フ也」(巻三第二十七「阿闍世王、殺ニ父王」語)、『三國伝記』の同話にも同趣の表現がある)、「人ノ子ヲ思フ事ハ、仏モ一子ノ慈悲トコソ譬ヘ説キ給ヘレ。我レ、漸ク老ニ臨テ適マ一人ノ男子ヲ儲タリ。懐ノ内ヲ放ツソラ、猶シ悲かなしみノ心難堪シ」(巻九第一「震旦郭巨、孝ニ老母一得ニ黄金釜」語)等に使用する「悲しみ」「悲しび」と同様の、慈悲に通じる意味がこめられているとみてよいであろう。ただし、通じるということは、「いとおしむ」が直ちに「慈悲」に言い換えることができる、という意味ではない。慈悲の延長線上にある、ということである。当該話に使用する「悲ム」語も同様に考えることができるが、子を思う母牛にふさわしく、牝牛には不似合いな語である。「悲ム」語に慈悲に通じる意があるとみることができれば、母牛の悲しみの心は仏が出家、成道して衆生の苦を救おうとする慈悲心の延長線上にある。なお慈悲を意味する「悲」の熟語に「悲母(観音)」がある。

当該話に使用する「悲ム」語がこの話だけに独立して用いられているのではなく、『今昔』の他話とも関わりあっているが、このことは当該話の牛をめぐるの母子についても同様に言うことができる。『今昔』では母子、親子の問題も主要な共通の問題としてとどころでとり上げる。この問題を天竺冒頭部の釈迦譚に焦点を当て、釈迦誕生から涅槃までの話や記述をおおざっぱにたどっても、次の諸点を指摘することができる。

釈迦菩薩は摩耶夫人の腹に宿って生れる(巻一第一、二)。釈迦誕生して七日目に夫人は没し、切利天に生れる(巻一第二)。悉達太子は父浄飯王に出家を求める(巻一第四)。仏は成道の後、子の羅睺羅を出家させようとする、

羅睺羅の母、耶輸陀羅——牝牛を母牛に呼称を転換したのと同じく、ここでは耶輸陀羅を仏の妻とはしない——は、「君仏ニ成リ給フ事ハ、慈悲ニ依リテ衆生ヲ安樂セシメムト也。而ニ今、母子ノ中ヲ離別セシメ給ハム事、慈悲無キ事ニ非ズヤ」（『経律異相』の同話に同趣の一文がある）と言つて嘆くが、仏は耶輸陀羅を説得する（卷一第十七）。仏の父、浄飯王が重病の床にある時、仏は靈鷲山から空を飛んで来る。父は仏の説法によつて阿羅漢果を得て死ぬ。葬送の時に仏は「末世ノ衆生ノ父母ノ養育ノ恩ヲ不報ザラム事ヲ誠メ給ハムガ為ニ」（『経律異相』の同話に同趣の一文がある）棺を担おうとする（卷二第二）。仏は一子、羅睺羅の手をとつて涅槃に入るが、それに続けて「然レバ此レヲ以テ思フニ、清浄ノ身ニ在シマス仏ソラ、父子ノ間ハ他ノ御弟子等ニハ異也。何況ヤ、五濁悪世ノ衆生ノ、子ノ思ヒニ迷ハムハ理也カシ。仏モ其レヲ表シ給フニコソハトナム語り伝ヘタルトヤ」（『打聞集』の同話に同趣の一文がある）の一文がある（卷三第三十）。仏の涅槃の後に母の摩耶夫人が天から下りると、仏は母夫人に悲しまないやうにと述べ、さらに阿難に「『仏金ノ棺ヨリ出デ給ヒテ、掌ヲ合セテ母ニ向テ、母ノ為及ビ後世ノ衆生ノ為ニ偈ヲ説キ宣ヒキ』ト可語シ」（『摩訶摩耶経』に同趣の一文がある）と告げる（卷三卷三十三）。迦葉が阿難に、仏の涅槃の時に摩耶夫人が仏の足に触れたのをなせ制止しなかつたのかと問うた時、阿難は「末世ノ衆生ニ祖子ノ悲ミ深キ事ヲ令知ガ為也。此レ恩ヲ知リテ徳ヲ報ズル也」（『注好選』の同話に同趣の一文がある）と答える（卷四第一）。

以上とり上げた諸例から、親の子に対する悲しみ、いつくしみは、仏の衆生への慈悲と通じあつていふと言つてよい。なお右の各引用文の後の括弧内で示したように、『今昔』の引用文と同趣の表現、一文が他の諸作品、文献の同文中にもみられることから、引用文にみられる考え方、理念は『今昔』独自のものではない。日本の同時代の諸資料に限つても、同時代の人々と共有する考え方であつた。ただし『今昔』の方が意識的、組織的に使用する。

天竺部の釈迦譚の場合は、親の子への悲しみの心に対する子の親への孝養心に主な狙いがみられる。孝養といつて

も単に親の面倒をみることではない。最終目標は親を成道させることである。この狙いは本朝仏法部の卷十五第三十九「源信僧都母尼往生語」についてもみられるが、以前とり上げた（桜楓社『中古説話文学研究序説』）ので省略するが、『今昔』の母子、親子話はこのような親の悲しみの心に対する子の孝養心の話だけ、というような図式的な話には限らない。例えば卷五第十三「三獸行ニ菩薩道」^一、兔焼レ身語」は、老翁に化身した天帝釈にわが身を食として供するために焼身した兔の話であるが、菩薩道を行う兔、狐、猿の三獸を見た天帝釈の心中思惟語に「此等獸ノ身也ト云ヘドモ、難有キ心也。人ノ身ヲ受ケタリト云ヘドモ、或ハ生キタル者ヲ殺シ、或ハ人ノ財ヲ奪ヒ、或ハ父母ヲ殺シ、或ハ兄弟ヲ讎敵ノ如ク思ヒ、或ハ咲ノ内ニモ悪シキ思ヒ有リ、或ハ恋ヒタル形ニモ瞋レル心深シ。何況ヤ、如此ノ獸ハ実ノ心深ク難思シ。然レバ試ム」とあるように、父母を殺す話が『今昔』にある。例えば阿闍世王が父王を殺す話（卷三第二十七）、吉志火麿が母を殺そうとする話（卷二十第三十三）である。一方、子を殺す話には、貧困に苦しむ郭巨が母を養うために子を穴に埋めようとする話（卷九第一）、洪水に流される僧が子を棄てて母を助ける話（卷十九卷二十七）、山中で襲われそうになった女が子を棄てて逃げる話（卷二十九第二十九）等がある。

このような様々な傾向の話をとり上げ、掲載するところに『今昔』の多様性がある。それらの中でも、当該話は右の卷五第十三の、自己を犠牲にして老人（帝釈の化身）にわが身を献じた兔と同じく、母性愛の理想化した動物話とみることができると考へる。

以上、当該話をめぐって二つの問題——当該話は世間話の体裁をとるが、作られた話であること、及び当該話にみる母と子の問題——をとり上げて述べた。右の論述で当面の私の考えは一応出したが、問題をすべて述べつくしたわけではない。世間話の体裁をとるが、実は作られた話は他にも見出すことができる。また母と子の問題を考える時には中古・中世期の他の作品（『蜻蛉日記』『成尋阿闍梨母集』等）との関わりにも言及の要がある。今回はそれらへの

言及は省略する。

ただ、一つだけ追加して述べておかなければならないことがある。それは、母牛が狼に立ち向かう時に、子牛を守ることに次に、「放チツル物ナラバ、我レハ被昨殺ナムズ」と思つて、狼を押えつけたことである。母牛が狼に立ち向かつたのは、まず子牛を守ることにあつたが、それとともにわが命を守るためでもあつた。^(注4)『今昔』には命が何にもかえられないことを述べる一文がある。例えば「世ニ有ル人ノ身不思ヌヤハ有ル」(巻二十四第十八)、「世ニ有ル人、命ニ増ル物無シ。亦、人ノ財ニ為ル物、子ニ増ル物無シ。(中略) 仏神モ命ノ為ニコソ怖シケレ。子ノ為ニコソ身モ惜シケレ」(巻二十六第七。同話の『宇治拾遺物語』第一一九の対応部に「人は命にまさる事なし。身のためにこそ、神もおそろしけり」とある)とある。

命を何よりも大切とする見方は、『今昔』だけではなく『宇治拾遺物語』にもみられるが、『平家物語』巻九「知章最期」にも同様の見方を背後に置くことのできる場面がある。生田の森の合戦で、新中納言平知盛は子の武蔵守知章の犠牲によつて命を助けられる。知盛は大将の平宗盛の舟に参り、子を討たれるのを見捨てて逃げて来たことを「人の上で候はば、いかばかりもどかしう存じ候ふべきに、我が身の上になりぬれば、よう命は惜しい物で候ひけりと、今こそ思ひ知られて候へ」と泣きながら報告する。いざという時、自分の命の惜しさに、わが子を見殺しにしなればならない苦しい立場は、右にとりあげた『今昔』巻二十九第二十九の、わが子を棄てて逃げる女と共通する。

以上、『今昔』巻二十九第三十八をとり上げて、二つの問題にしぼつて考えたが、この話だけでも、『今昔』の他の話や他の作品に通じる様々な問題を含んでおり、『今昔』話の問題の奥の深さと広さを感じる。

注1、秋の夜長が母牛と狼の死闘の場面に意味があることについて、小峯和明氏より指摘があつた。

2、『今昔』の同じ地域を記述する場合のうち『日本霊異記』を出典とするとみられる二話（巻十四第三十三、巻十六第三十八）は「奈良ノ右京」と記し、巻十一第十七、巻十四第三十四、及び当該話の三話は「奈良ノ西ノ京」と記す。『今昔』が資料として用いた文献の記述による相違とみることができよう。

3、戸外では星明りがあるので、真つ暗にはならないのではないか、という指摘が柴佳世乃氏からあった。

4、『今昔』には、何よりも命にまざるものはない、という見方があることを、渡辺麻里子氏より指摘があった。

付記、本論文で使用した本文は、それぞれ新日本古典文学大系により、旧大系、新・旧日本古典文学全集を参照した。『日本霊異記』『平家物語』等も同様である。